

第三十六回和辻哲郎文化賞 学術部門受賞作

嶺 秀樹 著『絶対無の思索へ コンテクストの中の西田・田辺哲学』

(2023年5月1日刊 法政大学出版社)

嶺 秀樹 みね・ひでき

関西学院大学名誉教授

1950年(昭和25年)8月1日 73歳 大阪府大阪市出身

専門は、哲学・西洋哲学史、京都学派の哲学

1974年、京都大学文学部(哲学科西洋哲学史専攻)卒業。1976年、京都大学大学院文学研究科(西洋哲学史)修士課程修了(修士号取得)。1979年3月、同博士課程単位取得退学。同年10月から1983年3月まで、西ドイツ・テュービンゲン大学留学(1981年9月までDAAD奨学生)。1983年2月、テュービンゲン大学にて博士号(哲学)取得。1984年4月、日本学術振興会奨励研究員(～1985年3月)。1985年4月、関西学院大学文学部専任講師。1988年4月、同助教授。その間、1988年10月から1990年6月まで、西ドイツ・アウクスブルク大学客員研究員(フンボルト財団奨学生として)となる。1993年4月、関西学院大学教授(～2019年3月)。2019年4月、関西学院大学名誉教授(現在に至る)。

主著に、*Ungrund und Mitwissenschaft - Das Problem der Freiheit in der Spätphilosophie Schellings* (Peter Lang Verlag 1983)、『存在と無のはざままで—ハイデッガーと形而上学』(ミネルヴァ書房、1991年)、『ハイデッガーと日本の哲学—和辻哲郎・九鬼周造・田辺元』(ミネルヴァ書房、2002年)、『西田哲学と田辺哲学の対決—場所の論理と弁証法』(ミネルヴァ書房、2012年)など。翻訳に、ハイデッガー全集第20巻『時間概念の歴史への序説』(共訳 創文社、1988年)、イェーニツヒ『芸術の空間』(共訳 青弓社、1993年)、フロイト全集20(共訳 岩波書店、2011年)など。

受賞のことば

このたび、拙著『絶対無の思索へ コンテクストの中の西田・田辺哲学』が和辻哲郎文化賞(学術部門)の受賞作に選ばれたことを非常に光栄に思っております。私はもともと西洋哲学史、とりわけカントやシェリングなどのドイツの近代哲学、ハイデッガーを中心にした現代の現象学・解釈学の研究者でした。2000年頃から日本におけるハイデッガー受容の問題をきっかけとして、和辻哲郎に取り組むようになり、さらに九鬼周造、田辺元、西田幾多郎などの日本の哲学者の研究を進めてきました。ここ10年ほどは、特に西田幾多郎と田辺元の思想に軸をおいて、両者の哲学が様々な思想との対話の中でどのような展開を遂げたかを探っています。我が国の哲学者たちの意義や独自性を明らかにするためには、彼らが対決を試みた西洋哲学のコンテクストの中で哲学としての可能性を追求すべきだという考えがあったからです。こうしたささやかな試みが、栄えある賞という形で評価して頂けたことをとても喜んでおります。

《選考委員評》

清水 正之

受賞作はここ十年間ほどの期間に書かれた論文集であるが、長年の研究的蓄積の上に、一貫した問題関心のもと、新たな哲学的な思索を豊かに実らせた佳品といえる。

第一部の冒頭部分に西田幾多郎の中期の思想を、第二部に田辺元を配して大きな対称軸として、その狭間に西田が概念形成の過程で対峙した西洋哲学、九鬼周造等の考察を挟み入れる。西田は、これら「哲学者のコンテクストのなかで」種々の西洋哲学の立場を包括しうる哲学を、ひるがえって「東洋的伝統」を生かし「自らの生命の要求」に答える深い哲学を掘り進めた、と著者は描く。

哲学が香気を放つ営為であると信じられた時代の頂点に西田哲学はある。人間の知情意の働きのなかにある「理想」の有り様を探求する姿勢が難解ながら共感を呼んだといえる。著者はよく知られた「形なきもののかたちを見、声なきものの声を聞く」という西田の言葉をてがかりに「叡智的なるもの（イデア的なるもの）」の考察を進める。西洋哲学の認識批判の伝統に添いながら、しかしそこに留まらずさらにその奥にある「絶対無の場所」の思想を形成し、認識批判と宗教哲学的関心をともに満たす道を模索したと西田を描き直す。一見静的にみえるイデア論にこそ事実的生や歴史性を形作る「動的意義」があるのだと。

ついで「種々の哲学」との対決を論じ、フッサール、ショーペンハウアーでは直観と思惟の形式が、ムーセ、九鬼周造の時間論等が西田に対照される。著者が長年向き合ってきたハイデガーを西田哲学との対比で考察するところは特に印象深い。「気分」をめぐる両者の異同の考察、またハイデガーの東アジアの思想哲学との対話について、独自の着想と視点から通説を超えた滋味溢れる分析が展開される。

田辺哲学は、以上の「コンテクスト」の中で描かれる。「西田哲学の地盤」から自己形成してきた田辺は後に反対者となるが、歴史における道徳的主体を基礎づけるころみは、西田の根本主張と異質ではなくむしろ同質なものであると喝破し、「絶対無の場所」を批判する田辺が、西田の「永遠の今」における「絶対的現在」に触発されて自身の「行為的自己」の着想に目覚めたとみる。

著者は、西田の「行為的直観」を頑なに受け入れない田辺を「もう少し寄り添う努力」をしても良かったのではないかと惜しみつつ、その田辺の後期の展開に「哲学の可能性」をみようとするが、この点は第二部の最も刺激的な箇所であろう。

全体を通じて、内在的な理解に徹し哲学者同士の「対話」を浮き上がらせる著者が、自ら「コンテクスト」の中の一人として立ち現れてくるようである。世界哲学のなかで日本の哲学がどのような寄与をなすのか、に正面から総身で向かう作品であり、西田・田辺の学統を継ぐ著者ならではの、爽やかな読後感をもたらす著書である。

野家 啓一

受賞者の嶺秀樹氏は、すでに西洋哲学および日本哲学双方の領域において優れた実績を有する哲学者である。今回の受賞作『絶対無の思索へ コンテキストの中の西田・田辺哲学』は、これまでの研究成果を土台にして、さらに百尺竿頭一步を進めることを目指した秀作と言ってよい。ただし、目次を一瞥した限りでは、時機に応じ求めに即して執筆された論文集との印象を与えるかもしれない。だが、瓦葺き構造にも似た個々の論考の相互関連は、二本の堅固な柱によって支えられている。一つは第一部「コンテキストの中の西田哲学」のバックグラウンドを形作っている著者のハイデガー研究である。第一部では西田哲学とプラトン、フッサール、ショーペンハウアーら西洋哲学者との対質が試みられているが、「永遠の今」と「行為的直観」を鍵概念として西田哲学の再構成を推し進めるとき、そこに著者独自のハイデガー理解の影が射していることを、慧眼な読者は見逃さないであろう。

もう一本の柱は、第二部「コンテキストの中の田辺哲学」を支えている、田辺—西田論争を俯瞰する著者の立ち位置である。著者はすでにこの論争をめぐって一書を成しているが、本書では田辺の初期（反省理論）から後期（歴史主義）にいたる思索の展開を丹念にたどり直しながら、西田の「行為的直観」に対する田辺の無理解と批判がどのような哲学的背景から生じたのかを追跡する。田辺の行為理解の狭隘さを指摘しながらも、彼の「生成する身体」の概念に着目し、そこから「西田と田辺の思想は相補的に互いを補う」という可能性を展望する行論の運びは十分に説得的である。

本書はすでに汗牛充棟の観のある西田哲学・田辺哲学研究の中に、未発掘の鉱脈を探り当てたという点で、今後の西田哲学・田辺哲学理解の里程標ともなる一書であり、まさに和辻哲郎文化賞学術部門にふさわしい受賞作を得たことをともに喜ぶたい。

関根 清三

学術部門は今年も、69 作品という多数の御応募をいただいた。ただその中で、^{フィロソフ}文献学・^{フィロソフ}哲学 両方において一頭地を抜く作品はないという点が、今年の特徴だったかと思う。若い研究者の博士論文は、準備の時間も十分にあり、留学先の図書館も完備しており、その上研究史との対決を厭わない批判精神も旺盛であれば、文献学的には自ずと堂々たる結構の大著となることが多い。ただ惜しむらくは、細かい文献学的手続きの先に、どういう積極的な哲学思想を見出すのか、その見通しが熟していないことが少なくない。それに対し長老の作品では、文献学研究史を網羅的批判的に渉猟することに注力しないが、それでも、それがさほど本質的な事柄ではないと達観し、むしろ本質は積極的な哲学思想を紡ぎ出すことにこそ存すると見定めている場合がある。今年度の受賞作、嶺秀樹氏の『絶対無の思索へ』は、

比較的薄い論文集とは言え、正に後者の典型であるように思われる。

例えば次の諸点に、私は感銘を受けた。

- (1) 西田幾多郎の哲学を解する鍵は、「叡智的なるもの」（イデア的なるもの）の意味をどう解するかにあると見、それを「絶対無の自覚的限定」の思想の内に位置づけ直したこと。
- (2) 西田の「叡智的なるもの」は、現象の世界を超え超時間的なイデアが、現象世界の瞬間にどう生成し、如何にして「行為的自己」を形成するかを示すものだと跡付けたこと。
- (3) 前著『西田哲学と田辺哲学の対決』で、田辺元の西田批判が多くの誤解に基づいていることを明らかにした著者が、もう一度、前中後期それぞれの時代の田辺の著作に寄り添って、何故そうした誤解に陥ったかまで再考していること。
- (4) 西田や田辺の思索の軸になった「絶対無」の思想的意義を、ショーペンハウアー、ヘーゲル、フッサール、ハイデガー、九鬼周造など東西の思想との、対話の「場所」を開いて問い直していること。
- (5) 世界の虚無を透見し、それによって未来の無限の可能性に覚醒し、自性への固執から解放されて世界を変革する主体に転換されるという田辺の歴史主義は、常に緊迫し泰然自若の趣きに乏しいと批判されがちである。それに対し西田の謂わゆる、常に自己否定的に開かれた仕方で物に即し物となって働く、行為的直観の思想に立ち帰るならば、その動きそのものが無限に開かれた根源的場所において安らう可能性を見出し得るのではないか。著者は、そうした西田と田辺の相補的統合にこそ、現代世界に不可欠な実存的態度を探り当て、一連の考察の画竜に点睛していること。

嶺氏の御著書は、難解をもって鳴る西田・田辺両哲学を俯瞰的に論じ、これについて鬼面、人を嚇すようなところのない、むしろ淡々とした筆致で語り抜き、しかも両哲学に対して常に温かい理解を示して、その現代的可能性を探り当てようとする姿勢が心地よい。世界哲学の必要が叫ばれ、西洋と東洋の哲学の融合が求められる現代だからこそ、絶対無の思索をめぐる日本からの一つの提言として、私自身大いに教えられ、また多くの読書人に一読をお薦めしたい佳品である。